

にはく行騰はむかばきのすそ白毛のかどをすぢかひに切てはくを云也、笠懸聞書射手具足秘傳の書に見えたり、

〔了俊大草紙〕犬追物事略○中 行騰は若人は夏毛なり、秋二毛は、老少共用なり、冬毛は老人ばかり

用なり、熊皮は判官と彈正官の人用なり、ひれの廣きはわろし、中腰は高きはひだに去は有てわろき也、中折より少上にあて、切なり、のどの狭きも廣きもわろし、中腰の廣さは八寸なり、好程なり、

〔高忠聞書〕二むかばきの事、鹿のかは本也、殊夏毛本也、犬追物、笠懸などには、おさなわかき人は夏毛を用べし、十八九廿あまりまでは、夏毛の秋かけたるを可用、中老宿老に至ては、秋ふたげの黒き皮を用べし、略○中

一行騰の事、笠懸、流鏑馬、神事に射る時は、若衆のことは不及申、歳七十八十に成共、黒夏毛の行騰はくべし、夏毛の行騰本たるによりての義也、犬追物時はくごとく、ながくはあるまじき也、いかにもみじかくつめてきるべし、神事行騰の切やう去るしをき候也、おりめのすそをすぢかへて切也、是によりて自然けがれをも除、神慮にもあふと申來るなり、略○中

一行騰のおこりの事、尋申候處、昔は今人の上下きたるごとく、いしやうにて不斷はきたる也、然間何事をもせよ、行騰をはきてしたる間、今にしきしきの時は、みな笠懸、小笠懸、流鏑馬、かりなどのときはくなり、略○中

一流鏑馬、笠懸、犬追物、又はかりの時、行騰を敷て酒をものみ、ひんをも付などするときは、左皮をとりて敷て座すべし、白毛の方左へなへし、むかばきのおもての方上へなして敷也、ひれの方、少たてさまにおりて敷べし、又白毛の方の折目のはしをたてさまに少折ても敷なり、二色の内いづれにても、一方おりて敷べし、ひれの方一かはにておりよきなり、行騰兩方ながらとりて、左皮